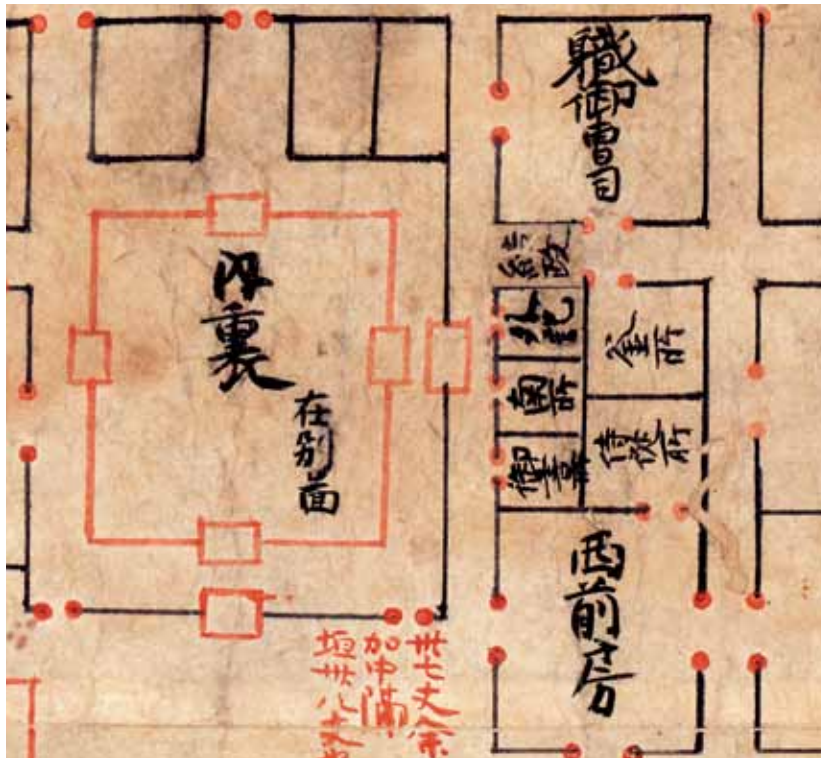
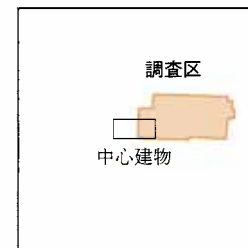


平安宮の井戸

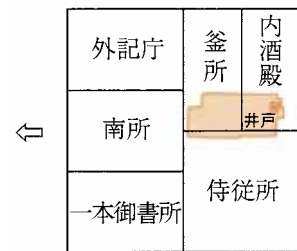
(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



陽明文庫本『宮城図』(部分)



区画の中心に大型建物の柱穴が発掘調査でみつかった。



区画が細分され、井戸が掘られた。

この役所の移り変わり

昨年、当研究所は設立20周年を迎え、この間、平安宮内で千数百件にのぼる調査を実施してきました。それらの調査で得られた成果から、役所の場所、役所内の建物の位置や構造なども明らかになりつつあります。ところが、これまでまったく発見されていない遺構があります。それが、井戸です。

上水道のない平安時代、井戸から湧き出る水は、飲料用、醸造用、儀式用、あるいは時刻を計る漏刻や湯殿にも使われました。したがって、それらを生産し、管理する役所は言うまでもなく、他の役所にも井戸が設置されていたことは想像に難くありません。文献史

料には、宮内にあった井戸に関する記事が見受けられ、このことを裏付けています。

井戸が文献史料に登場する時は、当然ながら異変など特別なことからによって、記事になります。その多くは、人が井戸へ墜落して死んだ記事です。一例を示しますと、内裏常寧殿じょうねいでんの東にあった后町きさきちょうの井戸には犬や雑仕女・女房が落ちています。陰陽寮おんみょうりょうの井戸では人が沈んでいるのも知らず、役人たちは、その水を汲んで使っていました。やがて、宮中けがれには穢けがれが広がったとあります。どうして、井戸に落ちた死者の姿すらわからないのでしょうか。やはり当時の井戸を

見つけ、様子をうかがうほかはありません。

さて、1996年4月、内裏の東側かなえどころの釜所うちさけの・内酒殿じじゅうどころに推定される役所跡の発掘調査で、平安宮内で初の井戸を発見しました。

掘形は方形で、規模は東西5.3m、南北5.6m、底までの深さは6.9mあり、平安時代の遺構としては最も深く、大規模な例となります。井戸枠は、井籠組せいりょうぐみと呼ばれる、厚板を横向きにして組み合わせ積み上げる構造で、井戸枠の一边は2.1mあります。平安宮は台地上に立地していますので、深くまで掘り下げ、より清らかな水を得ようとしたのでしょう。

内酒殿様
 作業員二名の食料、米八升を支払うようお願い申し上げます。一日の食料は、作業員一名につき、米二升となっています。山作りの時に応援に行かせた作業員の方です。
 弘仁元年十月十八日
 宮中の雑用を行なう大舎人の□□□より

内酒殿 夫貳人料飯捌升
 人別四升 弘仁元年十月十八日
 山作 大舎人□□□(安カ)



井戸から出土した木簡と内容
 (木簡は長さ 18.3cm、幅 3cm、厚さ 5mm)

調査を終えた頃には、文献史料の墜落の記事が、よりはっきりと実感できるようになりました。

ところで、井戸の調査中に、掘形と呼ばれる土層から木簡が1点出土しました。平安宮跡で発見された木簡の第1号です。木簡には、役所名・物品内容・年月日・差し出し人などが書かれています。役所の配置や変遷を知ることができ、平安宮研究の上からも極めて重要な資料です。この木簡からどのようなことがわかるのでしょうか。

まず、この木簡は、山作りに関わった夫(作業員)の食料の請求木簡と考えられます。通常、当時の夫の労賃は1人1日に付き米2升です。請求は8升ですから、夫1人につき2日分の賃金とわかります。

職務内容の「山作」については、一般には、山陵の造営や山で木を伐採する作業が思い浮かびますが、11月に嵯峨天皇の即位にともなう儀式の大嘗祭を控えた状況を考えますと、大嘗祭に不可欠の「標山」との関連が想定できます。大嘗祭の儀式には、即位した天皇が一大行列を仕立てて京中を練り歩く行事がありますが、標山は行列の先頭を示す重要な飾り山です。大嘗祭までわずかな製作期間しかないため、他の役所に所属する夫もかり出された可能性があります。この場合、山作りに関わった大舎人が、内酒殿に対して夫2人の食料を請求したと考えられます。

この井戸が掘られたのは、嵯峨天皇が大同4年(809)に即位してから1年半が経過し、大嘗祭を間近に控えた時期にあたります。

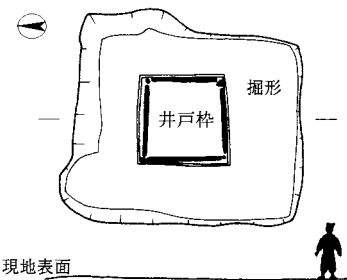
大嘗祭は、弘仁元年(810)11月19日に朝堂院で行われていますが、そこに至るまでの道のりは



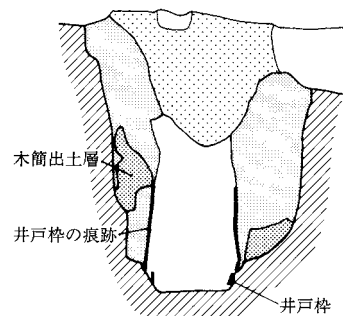
井戸の調査風景

順調ではなかったようです。この直前の、大同5年(810)3月には、嵯峨天皇によって蔵人所という新しい役所がつくられ、9月には、平城宮への遷都を企てた薬子の乱がおこっています。この乱はまもなくおさまり、9月19日には年号が「弘仁」に変わります。木簡が書かれたのも、そんなあわたたしさの中と推測できます。

嵯峨天皇による役所の新設や配置換えという新策により、酒造りの役所であった造酒司とは別に、この一画に「内酒殿」が新たに配置されました。この役所の目的は、内裏に供する酒を造ることで、そのために他に例を見ない巨大な井戸が作られたのです。ところが、出土した遺物を検討すると、この井戸は平安時代の前期後半には埋まったことがわかり、その頃に内酒殿はなくなったようです。その後のようすが陽明文庫本『宮城図』に表れているのです。(辻 裕司)



現地表面



井戸の平面と断面の模式図

まず、大きな掘形を掘り、中に井戸枠を設置してから周りの掘形を埋め戻す。